

栗野・徒然日記

四帖の巻・冬

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2023.12.5 秋から冬へ



鳥羽川も、眉山をはじめとする里の山々も、すっかり色づきました。

そんな鳥羽川堤を歩いていると、最近ほとんど見かけなかった植物を見かけました。寄生植物のマメダオシ?ハロウィンの時期に初対面のネナシカズラのことを書きましたが(10月30日の日記)、マメダオシに再開するのはおよそ60年ぶり、子供のころに、長良川の河原で見て以来のことです。ところが、良く調べてみると、外来種のアメリカネナシカズラのようなようです。ここにも外来種。

ところで、旧友と再会するため、京都、奈良に1泊で出かけました。観光の時期を少し外れていたのか、京都はコロナ前に訪れた時よりは外国人観光客も少ない気がしました。奈良をゆっくり訪れたことはなかったのですが、改めて、その歴史の奥深さに触れることができました。拝観に訪れた戒壇院の近くに、寄生植物のヤドリギに出会いました。子供のころ、やはり長良河畔の大木に2株のヤドリギを見かけたことがありますが、今ではその樹木も伐採されています。この時期に、銀杏色の小さな実をつけて、落下するのだけれど、見当たりませんでした。気温が高かったから、実りの時期がずれているのかもしれない。

栗野が初霜のころ、奈良も初霜が降りました。

季節は、着実に冬に向かっています。



▲時雨れる日が多くなりました。

▼アメリカネナシカズラの花と実





▲久しぶりに訪れた奈良市。戒壇院の境内から見つけたヤドリギです。

2023.12.8 樹木の生命



庭のモミジが、遅ればせながら紅葉しました。一枝、切子の器に投げ入れると、また違った味わいです。ガラス窓の初冬の日差しを透かしています。

実家から移植した大木のノムラモミジも、年代を経たヤマモミジも、根元付近の幹をテッポウムシ(カミキリムシの幼虫)に食い荒らされて、枯らしてしまったのが残念でした(写真のモミジは、枯れたヤマモミジの種が育ったもの)。栗野は、虫も多いですから、根元が草花で見えなくならないように気を付けなくては(後悔)。

栗野西の名刹・済法寺の黒松が枯れたようです。松枯れの被害にこれまであわなかったのが奇跡的とも言えますが。松尾芭蕉が1カ月ほど滞在したことでも有名な金華地区の妙照寺にも、そっくりな松がありましたが、20年ほど前でしょうか、やはり枯れてしまったことを思い出します。

先日、奈良に行ったことを先の日記にも綴りましたが、屈指の観光地の奈良でさえ、枯れた松の姿があちこちで見られました。

私にとって、樹木は何百年、何千年と生きるイメージがあります。その生命が絶たれることは、非日常の出来事。

まして、地域の大切なシンボルが失われたことは、残念至極です。

山装う季節、天を衝く松は、自ら葉を落とすことなく、佇んでいます。



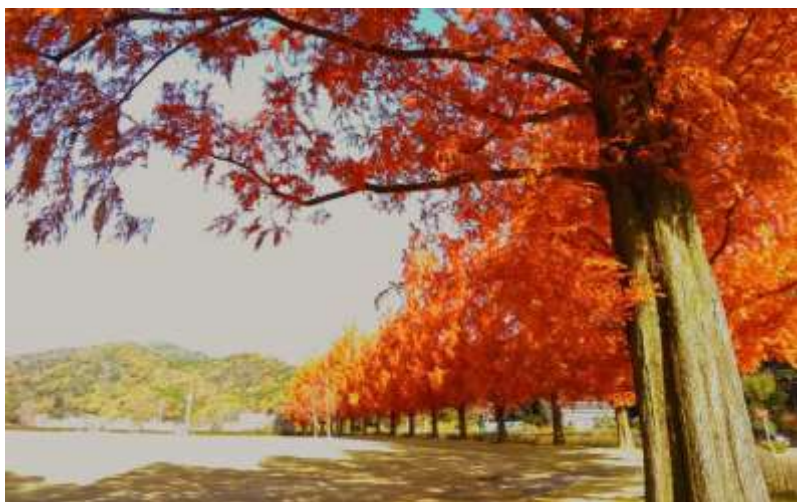
▲枯れ始めた濟法寺の松(12月8日)



▲元気なころの松(2019.11.24)



▲奈良市の大仏池の畔の松さえも、枯れ枝が目立っていました。



▲畜産センターのメタセコイヤは、もうじき落葉を迎えます。

2023.12.12 百舌鳥日和とは・・・



百舌鳥日和と言えば、秋の季語。空高く、電柱のてっぺんで、キーンとけたたましくなく百舌鳥が鳴いていたのは、もう1か月も前になるでしょうか。高鳴きと言って、なわばりを主張しているらしい。今日の空は、初冬とは言え秋空のよう。初冬だけれど、百舌鳥日和という言葉が似合う気がします。

まだまだ装いのさなかの山に向かって、黒木橋の上を“ぐるっとバス”が走っていきます。地域の皆さんの協力で5年目を迎えたコミュニティバスも、年々乗車数が増加しています。運営に当たっている運営委員の皆さんの苦勞も報われたかと思うと、晴れやかな気分になります。

庭のバラのとげに、突き刺さった干からびたアマガエルを見つけました。百舌鳥のはやにえです。そのまま忘れてしまうのに、とっていましたでしたが、冬の保存食として消費されることが分かっているそうです。

厳しい冬は、もうすぐそこまで来ています。



▶モズの「はやにえ(「供え物」という意味らしい)」

2024.1.19 野仏さま



旧岩野田村(現在は岩野田と岩野田北に分離)には、多くの石仏が寺や道端などに祀られています。「岩野田の歴史を語る会」が、平成15年と18年に発行した「岩野田の石仏Ⅰ・Ⅱ」によれば、江戸時代のものも含め、合わせて300体を超える石仏があると言います。

しかし、新しい住民が増加する中、忘れられようとしています？

そんな貴重な歴史資源を再発見するためにも、次号の“コミバス通信”で紹介することとしました。地域を知るきっかけになればうれしいですね。

冊子は、今では入手困難ですが、拝見すると、これだけの作業に取り組まれた熱意と手間に感心させられます。地図に掲載されている石仏を取材にも、一苦勞したのでそのご努力に感服します。一番古いとされる石仏(1684年)は、探し回っても見当たらず、公民館長さんにお尋ねしたところ、現在移設の準備中とかで、お目にかかれなかったり…。

そう言えば、50余年前(まだ、栗野には引っ越してきていませんが)、なぜか石仏に魅入られ、京都の石仏の写真を撮影して回ったものです。不思議なご縁です。

【冒頭の写真は、栗野西の阿弥陀寺の石仏】



▲栗野西・月野の地藏菩薩は、歯の痛みを直す地藏様として、遠方からもお参りがあったと言います。



▲栗野東・大龍寺の地藏千体佛の線画

2024.1.25 雪中の野仏さま



昨日から降り続いた雪も上がり、冬晴れとなりました。粟野台入り口の四叉路の一角に祀られた2体の石仏。1体は馬頭観音(トップ写真)。鳥羽川が現在より西に弓型に流れていた頃、馬が落ちて死んだのを哀れに思い、馬喰が建てたと言います。雪でお顔も隠れていましたが、30分もすると陽を受けて現れました。その横にはブロックで囲われた地蔵菩薩。明和8年の建立です。

前回ご紹介した阿弥陀寺の石仏群は、お寺の東側の高台にあるおかげで、ほとんど雪は溶けていました。西国三十三カ所として大正3年に建立され、今も新しい像が奉納されたものです。新しい石仏も近年奉納されているようです。

一方、お堂の西側のお地蔵さまは、日の差すのが遅いため、まだ雪に埋もれています。江戸時代に童子の霊を祀ったものと思われませんが、傾いているお地蔵様もあります。境内のお堂も手が入っていない様子ですが、慈愛の込められたお地蔵様、どうか大切に祀ってあげてほしいと願います。



▲明和8年(1771年)3月5日と刻まれている地蔵菩薩像



▲雪に埋もれた享保4年建立の童子の名が刻まれたお地蔵様。傾きが哀れ。



▲眉山と鳥羽川の雪景色。



▲カワウの群れに、生命の息吹・・・。

2024.2.19 雨水



暦の上では「雨水(雨水)」。降る雪が雨へと変わり、農耕の準備を始める頃。今日は、暦通りの雨が降りしきる1日となりました。

それにもまして、気温も季節外れの高い日が続いています。札幌では、観測史上最高の13度を記録。岐阜市でも雨にもかかわらず16度まで上がりました。さすがに、このまま春が来るとは思えませんが、どうなることでしょうか。

【写真:早咲きの紅梅】

これ以降の日記は、現在編集集中です。